

網羅編では、基本的に紙媒体における多木の仕事——執筆・談話・編集・監修・翻訳・写真撮影などを手当たり次第に記載した。建築以外の分野まで含めることは本誌の使命を超えているとも思ったが、巻頭で書いたとおり多木の仕事は脱領域的であり、建築と建築以外の線引きが困難なものがあまりに多い。したがって、その都度恣意的な判断を重ねていくよりは、確認できたものすべてをリストアップするほうが、目録の資料的価値は高くなると考えた。また、おそらくこうした網羅的な多木の著作リストはこれまでに作られたことがなく、たとえこの目録が不十分なものだったとしても、情報を出し惜みするより、すべてを提示したほうが遥かに意義深いことは疑いえない。

結果として件数は千数百件のにぼった。無念ながらそれでも漏れてしまった仕事は少なくないはずだが、この数ヶ月間、断続的に調査した実感からすれば、この数がここから1.5倍や2倍になるとは思えない。多木が活動したそれぞれの時代において、それなりの密度で情報を収集できたとは考えており、この目録をざっと眺めるだけでも、多木の活動の輪郭やその時々に関心が想像しうのではないかと思う。またそのために、記事等のタイトルだけで分かりにくいものは、なるべくその内容や評論対象、あるいは特集名を括弧内〔 〕に付記するようにした。

実際の調査方法としては、まずインターネット上の複数の検索システムで関連資料をリストアップした。有力だったのが国立国会図書館サーチ (<http://iss.ndl.go.jp/>) および CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) で、そこで大雑把に600件程度の検索結果が得られる。その他、美術図書館横断検索 (<http://alc.opac.jp/>) や「日本の古本屋」(<http://www.kosho.or.jp/>) のデータベースの類まで利用して情報を集めつつ、図書館などでそれらを確認・整理していった。もちろん各単行本の初出一覧も参照したが、初出の記載がない場合や雑誌の月号等が間違っている場合もあった。ともかくそうした作業によって徐々にリストが充実していくとともに、やはりデジタル化された情報だけでは不十分なため、主な建築雑誌や多木が常連的に関わっていた雑誌を通覧していった【00】。そのもろもろがとりあえず一段落したのが現状ということになる。なお、昨年6月頃、『視線とテキスト——多木浩二遺稿集』（青土社、2013）の編纂のために初期段階のリストを提供しており、その際、同書の編者のひとりである八束はじめ氏ほか、沖健次氏および伏見佳子氏の作業がその時点のリストに反映されることになった。

目録の表記で注意を要するのはテキストの改訂についてである。本誌p.214で触れているように、多木のテキストは、初出媒体から単行本への収録等の際、改題を含む大幅な改訂がされることが多い。ただ、必ずしも単純に前者より後者のほうが「質が高い」わけではなく、また当然ながら、ほぼ初出時のまま収録されることもある。つまり「改訂」の幅は極めて広いのだが、今回はそれも割り切って、複数のテキストに一部であれ具体的な関係が見いだせる場合には、それをすべて矢印で結んで表記した（原形をどめない改題の場合は、変更後のタイトルも記した）。それぞれ初版と改訂版を読み比べてみると、興味深い発見があるかもしれない。なお、註で示した多木の著作に対する書評等は、あくまで目に付いた範囲で、基本的に建築やデザインに関連するものを挙げている。

以上、長い前置きだが最後にもう1点、目録の誤りや抜けに気づかれた際にはぜひメール等でご一報いただきたい。確認の上、その都度本誌のホームページで情報を共有していけたらと考えている。

※基本的に雑誌媒体は出版社名の表記を省略した

【00】一定の期間にわたって通覧した雑誌は、『ガラス』『みんなのガラス』『デザイン批評』『デザイン』『季刊デザイン』『SD』『新建築』『インテリア』『建築文化』『アサヒカメラ』『美術手帖』『現代思想』『写真装置』『ユリカ』『へるめす』『ダンスマガジン』『大航海』など。

▽ 1955

● 「井上長三郎論」『みづゑ』1955.08 【01】

▽ 1962

● 編集『ガラス』1962.01? ~ 1971.01 【02】

▽ 1964

● 編集『みんなのガラス』1964.01 ~ 1972.10 【03】

● 「VISUAL ARCHITECTURE へのアプローチ——建築と視覚デザインの結合・粟津潔の場合」『ガラス』1964.01

● 「美しい宣言——デパートの中に建った2つの家—篠原一男展を見て」『ガラス』1964.04 →㊟ 【04】

▽ 1965

● 「『美の終末』について」[水尾比呂志「美の終末」『展望』1965.02] 『ガラス』1965.01

● 写真+文「COLOR・LIGHT・GLASS」『ガラス』1965.02

● 「ある疑問」[針生一郎「建築評論への不信」(『国際建築』1965.02)について] 『ガラス』1965.02

● 写真+文「光のあしおと」[写真：今井兼次「訪問童貞会修院(鎌倉)」] 『ガラス』1965.04

● 写真「フレームレス・ガラス・カーテンウォール」[三菱地所《旭硝子研究所ロビー》] 『ガラス』1965.05

● 文+写真「ものとしての認識と透視性——ガラスのデザインへの可能性」『ガラス』1965.05

● 写真+文「マンフレッド・レームブルック《ヴィルヘルム・レームブルック美術館》」『ガラス』1965.11

● 写真「L'ART DE VITRIL」[シャルトル大聖堂、ノートルダム・ド・パリ、サン＝ドニ大聖堂、サント・シャベル、アミアン大聖堂、ポーヴェ大聖堂、サン・エティエンヌ・デュ・モン教会] 『ガラス』1965.12

● 「スタンドグラス——空間の芸術」『ガラス』1965.12

▽ 1966

● 写真+文「ヨーロッパの壁 [1]」[《AGIP(燃料公社)ビル》、《イタリア放送局》、アンリ・ベルナル《メゾン・ド・ラ・ラジオ(RTF)》、ソッキニ《ガルバニ・ビル》、ヘントリッヒとベチュニヒ《フェニックス・ラインロール》、カムロ、マイイ、ゼルフュス《国立工業技術センター(CNIT)》、ジャン・ド・マイイ《ショールーム(フィアット)のファサード》] 『ガラス』1966.01

● 「仮象の論理——カルロ・スカルパについての覚え書」『ガラス』1966.01

● 写真+文「ヨーロッパの壁 [2] RTFのカーテンウォール」[アンリ・ベルナル《メゾン・ド・ラ・ラジオ》] 『ガラス』1966.02

● 写真+文「壁の中の世界——三つの教会(文：三つの教会)」[ル・コルビュジエ《ロンシャンの教会》、エンリコ・カスティリオーニ《プロスピアーノの教会》、ジョバンニ・ミケルッチ《サン・ジョバンニ・パチスタ教会》] 『ガラス』1966.03

【01】多木の処女論文。第2回募集美術評論(美術出版社)佳作。一席は中原佑介「創造のための批評」、審査員は今泉篤男、瀧口修造、植村鷹千代。

【02】『ガラス』は旭硝子の広報誌。2003年まで刊行されたが、60年代前後には、多木が主宰する編集プロダクションの株式会社 arbo(あるぼ)が編集・発行をしていた。広報誌という媒体の性質上、特に初期の号は公共の図書館での所蔵も限られており、今回は通巻35号(1962.01)以降、arboが編集・発行していた143号(1971.01)までを確認した(国立国会図書館蔵)。創刊からarboの編集・発行であったかは不明だが、35号の編集後記には「旭だよりをながいあいだご愛読下さったみなさまに、新しく『ガラス』をお送りいたします」とあり、34号までは「旭だより」という誌名だった可能性がある。また、35号からは縦組みだった誌面が47号から横組みになり、59号からは英文タイトル「GLASS & ARCHITECTURE」が追加されている。『ガラス』の制作において、多木は企画・編集から文章の執筆、写真の撮影まで全面的に関わっていたというが、文章や写真には必ずしも記名があるわけではない。おそらく多木によると思われるものでも、Tというイニシャルのみの場合や無記名の場合も多い。本目録ではそれらは割愛し、漢字もしくはアルファベットで記名があったもののみ記載している。なお、『ガラス』および後掲の『みんなのガラス』の調査にあたっては、当時arboのスタッフだった建築写真家の相原功氏および旭硝子の協力を得た。

【03】『みんなのガラス』は、『ガラス』と同時期にarboが制作していた、もう一つの旭硝子の広報誌(1964.01-1974.12)。こちらはガラスの小売店・施工業者に向けた内容で、多木の関与は『ガラス』に比べて少ないようだが、初期には表紙などの写真の撮影はしていたという。1号から104号(1972.10)までarboが編集制作・発行し、以降130号の終刊までは発行がarboで、編集制作が有限会社界。

【04】記事に多木の記名はなく、文末にイニシャルの(T)と記載。